書評

れてくる。はじめに分析の言葉を借りてきた者やおのれの主観的な分析手法をあらかじめ用意して読む者にはそれが障碍となって他の豊かな面が見えなくなる。

郡氏の場合、作者より高みにたつて作品を人から借りた手法でしかも難解な用語で「分析」してみせたり裁断したりするのと

異なり、芸術作品に対する深い尊敬の念が感じられるせいか、本書を読むと、プーシキンを読む楽しみが増え理解が深まり、その上に何かを付け加えたくなる。このような本こそ文学研究の名に値する。郡氏のさらなる発展を期待したい。

(ささき てるひろ・埼玉大)

法橋和彦著『ロシア文学の眺め プーシキン生誕二百年祭によせて』

新読書社、1999年、464頁

左 近 毅

一見誰でも文学を安易に語れるようであるながら、人間の営為の一切に関わるが故に、実は文学を語る場合程緊張を強いられる事は無い。就中、文学を語ることで文学をあれこれの目的の中に封印し、空洞化してしまう陥穽が作動するのだ。最近頃にその事を感じさせられる事が多い。ロシア人研究者たちの方法や理解はある種の職人芸に填り込んで、対象を絶対視してかかる傾向が強かったし、その傾向は今でも依然として変わらない。法橋さんはそれに決して溺れない。ただしそれとは位相の異なったのめり込みと徹底が、法橋さんの身上でもある。彼の競馬好きは世に知られているようだが、競馬はホルストメールを徹底して理解する至上目的へ向けての手段に過ぎないと評者には思える。そうでないとしたら、あれ程に儲からない競馬好きがいるだろうか。生の愛と哀しみの達人になる事が、文学の深部を覗く唯一の方法である点に法橋さんは我々の目を向けようとしているようだ。文学の領域にも押し寄せてくる市場価値の高いモードに足を掬われる事もなく、独自の境域を追求してきた法橋さんは、これ迄の

仕事を集大成する形式でこの著作を一つにまとめた。彼の絶えずファジー現象の如くに「ゆらぐ」世界、頻りに拡散する文学宇宙を一つに纏めるのは所詮無理がある。しかも彼の完結せざる体系は、本来開かれた無体系であり、一書に押し込めるなど無駄な抵抗ではある。それに法橋さんは未だこの先余白を文字で埋めていく旅を続ける意欲で横溢している。だから世上慣習化した「纏め」或いは「白鳥の歌」の試みは、法橋さんの場合基本的に失敗していると言わなければならない。つとに小熊秀雄に傾倒した早い時期から、法橋さんの複眼的眼差しは日露遠近の文学風景を相対化すると同時に、入れ籠構造の文学世界を押し拡げてきた。それは、干からびて手垢のついた昨今の比較文学的手法とは趣を異にする。その到達度の里程が、〈『征きて還りし兵』に贈る手紙〉で開示されている。そこでは、文学が凡ゆる国境を越えて論じられている。二葉亭を引き合いに出す迄もなく、あの時代には文学がロシアを語っていたのだ。作家がロシア文学を論じていたのだ。それが寧ろ常態であった。それがいつの間にか主

ロシア語ロシア文学研究 32 (2000)

客を転じて、ロシア文学研究が文学を辛うじて語る時代に変貌しつつある。さなきだに昨今、ロシア語研究がロシア文学を微に入り細に渡り分析し解体し、果ては分解遊戯を反復する行為でロシア文学の瑞々しい生命を失わせてしまう事態が横行している。法橋さんは、自分の足で、自分の心で日本からロシアへロシアから日本へ文学を渡り歩いているのだ。この姿勢はそうザラにはない。それも二国間に止まらず、より開かれた世界へ足を延ばそうと試みつつある。そこがいい。法橋さんはマージナリアから核心的中央に迫りつつあるようだ。或いは、法橋さんは自らを辺境に位置づける事によって文学の中央を透視出来たとも言える。体系乃至は方法なるものを前提にした文学研究、ロシア文学研究は余程自覚していない限り必然的に訴求力を喪失し、文学の血脈を断ち切り生命を殺いで自滅を志向する。プーシキンからトルストイではなくトルストイからプーシキンへのロシア文学の旅を、法橋さんは芭蕉や西行のように自分の足で確かめようと長い事歩いている。その模索の旅は法橋さんにとって未だ半ばの道程に過ぎない。旅の寓意の秘密を法橋さんは周縁（マージナリア）や余白と言う表現で、仄めかしている。

しかし何よりも文学は語るものでなく、生きるものだ。悲しい事に、それが判る迄人間は物理的な時間を生きねばならない。法橋さんにはそれが見えてきたようだ。法橋さんのトルストイ、プーシキン延いてはロシア文学、更には文学を眺める視線は、貪欲でかつ透徹している。矛盾と撞着に満ちた文学ないしは生を見据える複眼構造は、然し乍ら法橋さんの生理的宇宙にうまく納まっている。この評言で凡てが尽きてしまうのだ。「詩の翻訳は結局不可能である……」との高村光太郎にも拘わらず、詩は

心の言葉で訳す換言すれば言語でなく詩心を媒介に担体としての他言語へ移し替える事をしなければならない。さもなければ、プーシキン文学が日本の読者に愛され定着する機会は無事にやっっては来ない。三年前に法橋さんが本誌で批評した小澤政雄さんがいみじくも述懐したように、「くらやみの手さぐりにしろ、方向というものがあつたほうがいい」のだと評者も言いたい。昨年本誌で舛内裕子論文が指摘していた通り、その翻訳の中で明治期ロシア文学の先達「二葉亭は実に多彩な仕掛けを施していた」のであり、その為には余程の言語感性、日本語運用能力に通じている事が重要な前提条件になる。ロシア文学者に限らず、詩の境域をトコトン問いつめる者はせめて光太郎を悩ませた問題を悩むべきである。ことほど左様に、文学研究者と称される人士の間で「まず日本語ありき」が等閑視されている事態に序で乍ら警鐘を打っておきたい。ここで法橋さんも使っているプーシキン学と言う表現に、評者は違和感を抱く。とりわけ旧ソ連時代には、絶対化・聖物崇拜の傾向が強かった。プーシキノヴェーヂェニエと言う言葉にも、プーシキンの詩を学問・研究の分析ツールとして絶対的に位置づけるなにやら胡散臭い企図が感じられる。そこには、プーシキン研究を生活手段の対象とする多数の官僚的研究集団の自己保存本能すら感得される。プーシキンに限らないが、特定の学問的権威の枠内に文学を押し込める行為自体が自殺行為である点を、再考すべき時期にきているとの感慨を一入覚える昨今である。長年の畏友法橋さんとその著作に就いては、到底片言隻語で語り尽くす事は不可能である。意を尽くさぬ想いではあるが、空間有限の法則に依りさし当たり筆を措くしかない。

(さこん たけし・大阪市立大名誉教授)